

子どもの試行錯誤を促すワークショップの可能性を探る

－「あまり教えない」竹とんぼづくりの実践を通して－

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 湯本 仁亨

1. 研究背景

私には、失敗を恐れるあまり「まずやってみる」ことができないという悩みがある。これは私だけではなく、社会全体の課題でもある。

思い返せば、幼少期から今に至るまで、「失敗」は「悪いこと」「避けるべきこと」とされ、成功するよう導かれる教育を長年受けてきた。私が今、失敗を恐れるのは、そのせいなのかもしれない。

そう考えていたところ、「懇切丁寧な教育でしっかり育つ依存心」という言葉に出会った。まさにそのとおりだ。懇切丁寧な教育は、今なお広がり続けている。自分なりの手法を編み出すことに醍醐味がある泥団子づくり。それが、なんとキット化され販売されている。最高の土を見つけた時の興奮、途中で割れた時のショック、完成させるまでの試行錯誤の機会がすべて奪われてしまった。

「VUCA」という言葉が広がり始めている。変動性、不確実性、複雑性、曖昧性を英語にした頭文字を並べた造語で、これからは予測できない変化に富んだ（VUCA の）時代になるそうだ。予測困難な時代を生き抜くには、臨機応変な対応、試行錯誤やチャレンジが必要だ。失敗したり、何度でも試行錯誤できたりする機会を作れないだろうか。

そこで出会ったのが、竹とんぼづくりだ。

竹とんぼづくりには「試行錯誤」のきっかけがたくさん潜んでいる。①ナイフの刃のあてる角度が重要②手を加えた反応が見やすい③削りすぎて飛ばなくなるというリスク（リスクへのチャレンジ）④すぐにやり直せる（再チャレンジが気軽にできる）などだ。

この理想的な素材と、「懇切丁寧ではない」指導を掛け合わせれば試行錯誤を促すワークショップができるのではないかと考えた。そこで思いついたのが「あまり教えない」竹とんぼづくりワークショップだ。うまく飛ぶための丁寧な指導はせず、伝えるのは基本的な道具の使い方だけ。あとはそっと見守りながら、過不足なく関わる。でも、こんなに「不親切な」ワークショップ、本当に成り立つのだろうか。

2. 目的

子どもたちの試行錯誤を促すことを目的とした「あまり教えない竹とんぼづくり」の実践を通して

- ① そもそも成立するのか
- ② 試行錯誤が生まれるのか
- ③ 指導者はどう関わるべきなのかを確かめることを本研究の目的とした。

3. 研究の流れ

1. 基礎調査
竹とんぼの歴史・種類
現状調査
(国際竹とんぼ協会のワークショップを視察)
2. 実践 (3ヶ所のべ6日間)
3. まとめ

4. 基礎調査

4-1 竹とんぼの歴史・種類

竹とんぼは、紀元前の中国で生まれ、15世紀にはヨーロッパに伝わっていた。日本には、奈良時代に伝わったとされ、現在よくみる竹とんぼと非常に似たものが発見されている。竹とんぼは大きさ、材質、左右非対称など、多種多様である。「回して飛ぶ」というゴールに達する方法はひとつではなく、まさに試行錯誤の素材として最適であることを再確認した。

4-2 現状調査

あまり教えないワークショップの企画にあたり、まずは従来の方法を確かめるため「国際竹とんぼ協会」の教室に参加した。

1時間程度のワークショップ中、削る時間はたったの20分。材料はすでに薄く仕上げられ、参加者は、補助線や切れ込みが入れている部分だけを削るだけ。ナイフを直角に当てさえすればうまく削れるようになっていた。20分という限られた時間の中で竹とんぼづくりを教えるという点ではよく工夫されたワークショップだったが、試行錯誤が生まれる余地は、ほとんどなかった。

5. 実践

5-1 ワークショップの企画

成功に導くような補助線は入れず、何度も失敗してやり直せるよう、削る時間をできるだけ長くとりようにした。基本的な道具の使い方以外は指導せず、見守りと過不足のない関わりを意識した。

5-2 ワークショップの概要

対象：子ども（保育園児から小学生程度）

時間：フリー（好きなだけ）

流れ：

- ① ナイフを使う際の注意点を説明する
- ② 材料とサンプルを配布する
- ③ サンプルを見ながら削ってもらおう
- ④ 飛ばせるようになったら飛ばし方を説明する
- ⑤ 必要に応じて削り直してもらおう
- ⑥ 参加者が納得いく竹とんぼができれば完成

観察方法：観察者を1名配置する

5-3 観察のポイント

観察者の観察のポイントはふたつ。

1. そもそも成立するのか

- ① 参加してくれるのか
- ② 途中で帰らないか（行動）
- ③ 怒ったり、嫌になったりしないか（行動やコメント）

2. 試行錯誤が生まれるのか

- ① 削るときにナイフと竹の角度を変え、自分の削りやすい方法を模索しているか（行動や発言、表情、削りかすなど）
- ② 作った竹とんぼを飛ばしてみても、納得いかない場合、羽根を削り直しているか（行動や発言、表情）

5-4. 実践結果

実践は3カ所で述べ6日間行った。

5-5. 観察結果

実践① 2023年5月20日、21日@山梨県

途中で帰ったり、怒ったりする人がいないどころか、「また作りたい！」と2日連続で参加する子がいるほどの人気。保護者からは「こんなにひとつのことに集中して取り組めるなんて驚きました。ありがとうございます。」という感謝のコメントまでもらった。

実践② 2023年10月7日、8日@岐阜県

「飛ぶかどうかはキミ次第！？」という看板と「不親切なワークショップだよ！」という勧誘で出展。主催者から「1回90分程度」という要望があったため、短い時間でも試行錯誤が生まれるのかを観察した。

短い削りかすしかでなかった子が、介助しながら気持ちよく削れる刃の当て方を体験すると長い削りかすが出せるようになった。完成すると、時間が過ぎてもサンプルと見比べながら、何度も飛ばしては削り直すことを繰り返していた。

しかしこんなことも。うまく削れず、疲れた様子を見せていた子どもに見かねて、保護者が「疲れたなら、後で家に帰ってやる？」という声かけがあり、帰ってしまった。「もう少し早く気づいて寄り添うことができれば・・・」観察が失敗したケースだった。この失敗から、試行錯誤を促すワークショップでは参加者の心の動きを察知して対応する高度な技術が求められることがわかった。



実践③ 2023年11月11日、12日@岐阜県

途中で帰る人はいなかった。そしてまたも2日連続で来る子がいた。印象に残ったのが、作った竹とんぼを何度も飛ばす姿だった。腕を上げてみたり、角度を変えてみたり。飛ばし方も試行錯誤のポイントであることを子どもたちに教えてもらった。

そうした中、飛ばない竹とんぼを床で回して「こま」にして遊ぶ子どもを発見！「成功に導く竹とんぼづくり」ではおそらく見られない光景だ。失敗とされてしまうことも、このように新たな可能性として生まれ変わるこそが VUCA の時代に必要なのであろう。

6 まとめ

6日間73名の参加者のうち、途中で帰ったのはたった1人。怒ったり、途中で投げ出す子も、その子以外いなかった。保護者からのクレームもなく、逆に感謝もされた。これらのことから「あまり教えない竹とんぼづくり」が成立すると言える。

これまで紹介したエピソードからも分かるように、何度も刃を当てる角度を変えながら、よく削れる角度を探し当てたり、飛ばしては削り直すことを繰り返しながら、納得いくまでやり続けたりする姿が何度も見られた。これらのことから、試行錯誤が確実に生まれていると言える。

試行錯誤を促す場の指導者に求められるのは①子どもたちには試行錯誤する力が元々備わっているという意識 ②子どもたちの行動や表情の変化を感じ取れる観察力と感受性 ③心と体の安全を保障できる空間づくり ④失敗してもやり直せるだけのゆとりある時間 ⑤過不足のない関わり方 であると結論づけた。

私自身の「いつも失敗を恐れて動けない」という悩みから始まった課題研究だが、研究を終えてみて感じることは「失敗も成功も存在しない」ということ。成功するかではなく、全ては行動に対する反応で、その結果が「よし！」と自分で納得できるかどうか。納得できないのであれば、納得いくまで何度でもやり直せばいい。と考えられるようになった。おかげで、これからは気軽に一步踏み出せそうな気がする。

7 今後

私は卒業後、地元、埼玉県の NPO に就職し、子どもたちの居場所づくりの仕事を始める。今回の経験を生かし、子どもたちが VUCA の時代を楽しみながら生き抜ける、そんな力を育める場づくりをしていきたい。